

お風呂

瀬石桃子

すべては崩壊してしまった。崩壊なんて生易しいものじゃない。ことごとく消滅しちゃった。突風が吹いて砂山が吹き消されるような、さびしくってひどすぎる暴力、そういうものだった。あの日、あの言葉が銃口から放たれた瞬間、死ぬと思った。致死性の、急所を外さない、冷たく恐ろしい弾丸だった。即死だったの。だからもうわたし、何も言えなくなつて、うなづくことしかできなかった。そういうのってはじめのことだった。愛の柱が、根元のほうからぼきりと折れてしまったのだ。うずたかく積み重ねてきたねんごろな乙女のまごころは、いつの日からか、右にほつれて左にもつれて抜き差しならなくなり、こうして最後には、糸くずのようにたやすく捨てられる。

どうしてわたしの人生はかくもむごいのか。わたしの砂時計は、いびつな形をしているのではなくって。

しかし、もう知りません。あの人は帰ってきません。わたしを置いて遠くに行っちゃいました。いつも、後ろから

あの人の影を踏んで、てくてく歩いているとき、何気なく得意な気持ちになりました。温かいスープのようなものが胸の中にわき起こって、どうしてかしら、心地よくなるのでした。ささやかな楽しみ。甘ったるさが水飴のようにずっと間延びしたような、あの感覚・日々。誰彼に構わず、怒らずに諭して微笑んでしまいたくなる、寛容さ。平和ボケと言うのかしら。わたしったら、いい気味。あの子はいい気味だった。

それにくらべて今のありさまの、なんとみすばらしいこと。鏡で見たわけじゃないのだけど、なんとなくわかるわ。でもほんとうは見えてみたい気も、する。見たらびっくりしちゃうと思う。目の前には、得たいのしれない醜悪さまじいもののけの姿がある。色は褐色で、毛むくじやらの腕をしていて、原始的なすどく尖ったからだをしている。月の美しさも、萌ゆる自然の神秘さも、広い海の青さも知らない。人に恋をするための情熱の皮ふは、かたくざらざらしていてまともではないし、口づけをするためのくちびるも薄皮がはがれて痛々しい。けれども、さしものもののけですら、自分の姿を確かめないうちは普通の人間でいら

れるからね。

そうよ、自分を知ろうとするなんて冷酷な好奇心だわ。

まして他人の言動を通して自分の本性を暴きたいなんて、いけません。

反省、反省。もう一回、反省。

わたしはもうちょっと大人になろう。となりの家のふみちゃんは、もう旦那さんがいる。半年ほど前に、出し抜けるにすっぱりと結婚をした。みんな驚いて騒ぎまくった。そんなこともあったけれど、相手の人はたぶんいい人だ。ふみちゃん人は人を見る目がある。わたしはその目が羨ましかった。そうすればこんなかない思いで、いつまでもいつまでもぐうたらとした時間を過ごさずにすんだのに。

この、でくのぼうよ。

気づくと鼻をかむためのちり紙がなくなっていた。鼻の奥がすんすんする。泣きすぎちゃったのか、鼻の奥はしょっぱい涙の味がする。鼻なのに味がわかる、最初は不思議に思った。けれどよく考えてみると、鼻と口はつながっているんだから当たり前だった。

くしゃくしゃのちり紙をゴミ箱に放り捨ててからカレン

ダーを見た。

五月のページ。かきつばたの絵があった。

それからゴールデンウィーク。この安っぽい言葉には親しみがわかない。日本人はなんにでも名前やら符牒やらをつけたがるくせがあります。ふだんの平日に休みがやってきて、おかげさまで土日を含めてちよっぴり長い休みができるからって、たかだかそれだけなのに世間は浮き足立つ。そんなんでわたしも、身の丈に合わない熱気につられて一生懸命ばたばた踊ってみるのだけど、どうやってたげんき。クリスマスとかと一緒に。世間の風潮に流されたってちっともいいことなんてない。

だけでも五月はいいこともある。母の日があった。母の日はお母さんを連れ出して映画館に行った。見るのは何でもよかったのだ。とにかく、お母さんが元気でいてわたしが元気でありさえすればよかった。それが親子にとっていちばん肝腎なのだ。映画を見たら、おながが空いたのでごはんを食べた。お母さんはお蕎麦を食べて、わたしはどんかつ。わたしは濃い味つけが好きだから、かつにいっぱいソースをかけると、お母さん怒っちゃった。いつものお母

さんだった。この日は怒られないようにしていたつもりなのにすごくかなしくなっちゃった。だからわたし、心から謙虚になって、もう悪いことはしません、って誓った。お箸をきれいに揃えて、お皿もきれいに拭いて、かすもこぼさない。ちゃんとしたら、お母さんはご機嫌になって褒めてくれる。褒めてくれるお母さんは好きだ。お母さんが褒めてくれると、幸せのかおりが充満してすごくいい。

下の階から声がしてきた。

「いつまでめそめそしていらっしやるの」

お母さんの声だ。続けざまにばたばたと廊下をわたってくる音が聞こえた。

「あ、お婆ちゃん。ええ、はい、そうなんです。一時間ほど前から何度も呼んでいるんですが返事がいっさいなくって。ええ、はい、すすり泣く声だけは聞こえているから、大きな問題はないのでしょうか、ええ、はい」

お母さんはわたしのことを知らないのだ。わたしが泣いている理由を。返事をしてあげないのは、察してほしいかなのにどうしてわかってくれないのだろう。

とも子さん、心配する気持ちはわかりますが、あの年く

らいの女の子がひとりで部屋に閉じこもってしまう原因をいくらかお考えなさい」

わたしはお婆ちゃんの言葉が気になったので、泣くのをやめて扉に聞き耳を立ててみた。

ほら、自分自身のこととして考えてみれば、ひとつかふたつ、思いつくでしょう。母も子も、抱える悩みに大きな違いはありませんからね」

はあ、そういうものでしょうか」

お母さんは少し困惑している様子だった。それからしばらく黙った末、お母さんは口を開いた。

もしつらいことがあったら、いつでもお母さんに相談しなさい。お母さん、待ってるから」と言い、あとお風呂沸いてるから、ぬるくならないうちに入っちゃいなさいね」

このまま部屋にいてもろくなことはないと思った。わたしは約束通り、心から謙虚になるのだ。陳腐な意地を張ってみてもしようがない。大げさかもしれないけれど、こんな狭い部屋で悲劇のお姫さまのふりをしたって、情に厚い王子さまが迎えに来ってくれるわけじゃないから。

そんなことより、わたしは泣き噎らして喉が渴いたのだ。

水を飲もう。そしてお風呂も入ってしまおう。心から謙虚に。お母さんの言うことはただし。

わたしはすくくと立ち上がって扉をそっと開け、階段をトントンと降りた。一階には誰の声もなかった。家中はのっぺりとしたしじまが漂っていて、わたしひとりを取り残して寝静まってしまったみたい。白河夜船、って言うんだっけ。

夜のお風呂はちょっぴり怖い。がらがらと硝子戸を開けて浴場の電気を点けてみても、しらけた宵闇があるだけだった。頼りないはだか、はだし、むき出しの皮ふ、へこんだおなか。肩は骨ばってかわいそう。しかし、このからだと一生つき合っていくほかはないし、いつかは愛される肉体を得たい。

ああ、お風呂、お風呂。

湯船は繊細な陰影のついたシルクの布のようで、さまざまに淡い色合いの、満ち足りない感受性と、さっぱりとした苦悩の波紋がはかなくゆれていた。わたしはお湯で横溢した浴槽を上から覗き込んだ。そこにもものけはいなかった。少女のぼんやりとした顔が、ひとつあるだけだった。

そのまま水面を見つめていると、わたしのたましいがそこに溶けていくような気がした。それも良いかもしれない。それも良いじゃありませんか。溶けたとしても、また掬いあげれば良い。べつに、お風呂に入ったって死ぬんじゃないやありません。

ほんの少し真面目にさびしくなって、たかだか数ミリの薄い膜に隔たれた絶対的な距離を、どうやっても埋められないんだなって、そういうむなしさをむさぼりつつ、わけもなく湯船をじゃぶじゃぶとするだけです。

そうしてからだを髪をてきぱき洗って、すべてが終わってしまったら、その場に突っ立ってみて、目を閉じてはつきりと口にする。

すべては崩壊してしまった。

けれど忘れてはならない。

脆く崩れた珊瑚礁のわずかなすき間から浮き上がる星々の粒子。

人はそれを、希望と呼ぶんじゃないやありませんか。